総括報告

関根清三

2003年11月28日(金)・29日(土)の両日、東京大学文学部一番大教室に、内外からの講師をお招きして、公開シンポジウム「死者と生者の共同性」(人文社会系研究科・21世紀COEプログラム「生命の文化と価値をめぐる死生学の構築」主催)が開催された。シンポジウムは三部から構成され、そのプログラムは以下のとおりであった(同時に配布された趣旨文については、次項に掲げる)。

第一部　講演会「現代哲学は死をどう主題化してきたか」

日時：11月28日　15時半—17時15分(東京大学文学部法文二号館一番大教室)

講演者　Guenther Poeltner (ウィーン大学)

コメンテータ　関根清三(東京大学)

司会　松浦　純(東京大学)

◇18時—20時　懇親会(フォレスト本郷)

第二部　シンポジウム「諸文明における死者と生者」

日時：11月29日　10時—12時半(東京大学文学部法文二号館一番大教室)

10時—11時20分　報告

11時30分—12時30分　コメントと討議

パネリスト　Stephen Teiser（プリンストン大学）
　　宮本久雄（東京大学）
コメンテータ　関守ゲイノー（東京大学）
　　塩尻和子 (筑波大学)
司会　池澤　優 (東京大学)

第三部　シンポジウム「死者と生者の現在」
日時：11月29日14時—18時（東京大学文学部法文二号館一番大教室）
　　14時—15時30分　報告
　　15時45分—18時　コメントと討議
パネリスト　渡辺　裕（東京大学）
　　渡辺哲夫（東京医科歯科大学）
　　James H. Foard（アリゾナ州立大学）
コメンテータ　菅野覚明 (東京大学)
　　Fabio Rambelli（札幌大学）
　　川村邦光（大阪大学）
司会　末木文美士（東京大学）
総合司会　関根清三（東京大学）

以上のプログラムに沿って進められたシンポジウムの個々の議論の詳細については、本号に掲載される各論者の論考をご参照いただくこととして、ここではそのごく大まかな要点と流れについてのみ、摘記報告することを試みたい。

28日（金）午後は、一番大教室を満たした約120名の聴衆を前に、まず稲上毅・人文社会系研究科長から、最近ご母堂を亡くされた経験に言及した心に残るご挨拶をいただいた。続いて総合司会の関根（以下、特に断らない場合は本学大学院人文社会系研究科所属）が、かつて祖先崇拝の思想を日本人

の美徳としたラフカディオ・ハーンを引いて、現在の日本人の傾向と諸文明の比較を旨とする、このシンポジウムの趣旨について述べた。ヨーロッパの個人主義的傾向を批判して、和辻哲郎等が他者との共同性に注目した時、他者は空間的な生者に限られていたのに対し、このシンポジウムでは時間的な過去の他者、すなわち死者に注目するという課題が確認された。こうした趣旨に沿ってシンポジウムは、三部から構成された。

第一部は、「現代哲学は死をどう主題化してきたか」というテーマで進められた（司会・松浦純教授）。ウィーン大学のG・ペルトナー教授が、「現代の哲学的な死の理解の諸相」と題して重厚な基調講演をされた。来世や輪廻等を想定した形而上学的な死についてもはや語ることをせず、無として死を捉える傾向を指摘して、参加者に感銘を与えた。続いて関根がコメンテータとして、現代のハイデガー的な無が、西洋の伝統的な非存在や東洋の絶対無とどう関係するか、またそのニヒリズムの哲学が切り落としがちな他者問題を掬い取って、生者の記憶の中に生き続ける死者との共同性についてどう考えるかといった問題を指摘した。フロアーからも活発な質問と、それに対するペルトナー氏の丁寧な応答があり、充実した第一部となった。夜はフォレスト本郷に場所を移し、一ノ瀬正樹助教授の司会で懇親会が催された。

明けて29日（土）は雨にもかかわらず前日とほぼ同数の聴衆が集まり、先ず総合司会の方から一部と二・三部の関係について要約がなされた後、午前中、第二部のシンポジウム「諸文明における死者と生者」へと進んだ（司会・池澤優助教授）。プリンストン大学のS・タイザー教授と、総合文化研究科の宮本久雄教授が発題を担当された。タイザー教授は、スライドを多用して仏教における死の幾何学について語り、宮本教授はヘブライ的なハヤトロギアという氏固有の観点から、現代における象徴的な意味での死（例えば無権利な難民）と生（難民共同体）の間に立って祝祭的空間をいかにして創出するかについての構想を提示された。コメンテータは東京大学東洋文化研究所の関守ゲイノー助教授と塩尻和子筑波大学助教授が担当され、それぞれ修

験道やイスラム思想という御専門の領域との関わりで論じられた。

29日午後は続いて、第三部のシンポジウム「死者と生者の現在」が開催された（司会・末木文美士教授）。パネリストは渡辺裕教授、渡辺哲夫東京医科歯科大学教授、J・フォード・アリゾナ州立大学教授であり、それぞれのコメントは菅野覚明助教授、F・ランベッリ札幌大学教授、川村邦光大阪大学教授が担当された。渡辺（裕）氏は、葬送行進曲やレクイエムの演奏を流しながら、西洋音楽にみる死生観の「近代」について語られた。コメンテータからは政治との関わり等が問題とされた。渡辺（哲夫）氏は、父親を殺した統合失調症の患者の例を引いて、生者と生者の共同性という表層ではなく、生者と死者の共同性という深層にまで遡らないとカタストローフに陥るとして、精神病理学的視点から現代に警鐘を鳴らした。しかし生者と生者の共同性を表層と断ずる理由は何か等が問題とされた。最後にフォード氏は、ホロコースト・ヒロシマ以降、無意味な大量死の意味づけは、死者に近しい生者の記憶において将来そのような大量死を防ぐ手立てとする以外にないであろうという見通しについて語られた。しかしあれは大量死ではなく大量殺人というべきではないか等の疑問も出された。最後に拠点リーダーの島薗進教授が、このシンポジウムに内外から集ってくださった全ての方々への謝辞を述べて、盛大な拍手の中に閉会となった。

第一部で現代のニヒリズム哲学の視点から、来世といった形而上学的な死について語る語り口を放棄したらどうなるかという問題提起に始まった本シンポジウムは、第三部に至って、理不尽な死を遂げた人々を初めとする、近く遠くの死者たちを記憶し、自己の歴史的出自に思いを致す、そういう生者の死者との共同性という方向に、ニヒリズムを超克して行く一本の道を見出して、或る円環を結んだように思われた。二日間の共同の探求の一里塚をこの辺りに見出し、これを作業仮説として、またそれぞれの研究の場に持ち帰って更なる吟味を加え、ここに端緒についた共同の探求を今後もまた連携しながら深めて行くことができれば、と主催者側としては念じている。二日目

の夜の打ち上げでの内外のパネリストの感想や、聴衆のアンケートに拠れば、そうした思いは多くの参加者に共有されたようである。

なお2003年度COEの予算で、文学部一番大教室に同時通訳の機器を購入し、今回はそのお披露目のシンポジウムとなった。主催者側の努力で予め資料集に翻訳が掲載され、それに負った部分も多かったとはいえ、明晰な通訳で大方の聴衆は満足されたと聞いている。

終わりに、講演・発表・コメント・司会等の労を取ってくださり、充実した形でこのシンポジウムを作り上げてくださった上記の全ての先生方、またご多忙のなか協力を惜しまれなかった学部長・事務方、そして準備期間から当日の運営まで、次々と出て来る問題を乗り越えては見事に実務をこなしてくださった杉木恒彦・飯田篤司両氏を始めとするCOE特任研究員の方たちへの、感謝の思いをここに改めて明らかにし、総括の結びに代えることとしたい。

（せきね・せいぞう　東京大学大学院人文社会系研究科教授）

趣旨

関根清三

我々は、生きている限り、自分の死を経験できない。この意味で、死は謎めいて我々の遠くにある。

しかし死は、「生の終焉」と定義されるように、生との関連においてのみ考えられる。またその死がいつ訪れるか知れないという認識は、生の根源的事実として、人の生そのものを規定している。その意味では、死は我々のすぐ近くにある。

生まれ落ちた瞬間から、遅かれ早かれ訪れる死に向かって歩み出しているのが生だとすれば、それはすでに死を含み、人に或る覚悟を強いる。

加えて、自分が愛する者の看取りや弔いをかつてなした記憶、いつかまたなすかもしれない可能性は、人の生に深い襞を与えているように思われる。

あるいは、受難や犠牲の死を遂げた死者の記憶が、生きている個人ないし社会を、根源的なところから、震撼し、あるいは支えている、そうした生の場面もある。

生と死は互いに絡みあう。

近代社会は死をタブー視し、日常生活の外へと排除しがちだったが、近年これを我々の生と表裏をなすもの、むしろ生への姿勢を規定するものとして、生との絡みにおいて見つめ直そうとする傾向が顕著である。それは、脳死や安楽死、臓器移植や妊娠中絶など、生命科学の進歩によって生死をどこまで

人為的に操作できるかという、生命倫理の問題としても主題化されるが、本シンポジウムは、むしろこれを生命科学とは切り離して、特に哲学、倫理学、あるいは宗教学、心理学などの人文学諸分野の視座から論ずることを主眼とする。

しかも特に「死者と生者の共同性」といった辺りに焦点を合わせて、死者の弔い、慰霊、鎮魂、供養、追悼、墓参といった日々の生活の中に生き続ける、死者と生者の共存のあり方について、何がしかの考察と反省を加えたい。あるいは、無念の涙を呑んで死んで行った者への記憶、その衝撃との風化しない対話、死者からの精神的な働き掛けとその社会的意義、そういった諸点へと議論を収斂させて行きたい。それが、国民国家の招魂儀礼と体制維持のための、戦没者追悼行事であったり、あるいは苛め殺した者への、苛めっ子たちの遅すぎた挽歌、また生者たちの自己慰撫や守護願望を抱いた、死者の祀り上げであったりしつつも、どこかに死者の声なき声に耳を澄ませ、死者と共に生きようとする感受性を包含する限り、こうした死者との共同性は、我々の生を構成する重要な要素であり続けるように思われるのである。

このテーマをめぐる、古今東西の諸文明それぞれの特徴あるアプローチの仕方と、それらになお通底するもの、さらには、それらが現代の我々に問い掛けるものを、この討論の場で、問い拓いて行きたい。諸外国、諸大学からお招きした、当該分野を代表する研究者たちと、東大の諸学科の教官たちが、共に語り合い、共に知見を拓いて行く場としたいと希う。大方のご参加とご意見を仰ぎたい。